

半田市 蔵出し情報 報道機関提供資料

問い合わせ	新美南吉記念館 館長 遠山光嗣 電話 0569-26-4888
-------	---------------------------------------

令和5年5月26日提供 (事前情報・事後情報)

名 称	童話に登場する「井戸新」ゆかりの品や石碑が寄贈されました
日 時	企画展開催期間 7月2日（日）まで
場 所	新美南吉記念館（半田市岩滑西町 1-10-1） 企画展会場：展示室 石碑移設場所：童話の森
寄贈者	さかきばら みのる 榊原 實さん（半田市長根町 1-103／電話 0569-29-5203）
内 容	企画展「ぼくは井戸である～「牛をつないだ椿の木」考～」の開催を記念し、童話「牛をつないだ椿の木」に登場する「井戸新」こと榊原新一さんの孫の榊原實さんから「井戸新」ゆかりの品を寄贈していただきました。また、新一さんが昭和38年に自宅に建立した石碑「探清泉」もあわせて寄贈され、5月22日（月）に記念館敷地内の童話の森に移設しました。どちらも記念館でご覧いただけます（企画展でのゆかりの品展示は7月2日（日）まで）。
担当者 情熱メッセージ	・新美南吉は、実感を込めてリアリティのある作品を書くために、実在の人をモデルに物語を書くことがよくありました。「井戸新」こと榊原新一さんはその代表例です。石碑に刻まれた「探清泉」の文字は、井戸掘りを稼業にしていた新一さんらしいのはもちろん、新美南吉生誕110年のキャッチコピー「さあ この泉を汲んでくれ」（南吉の詩「泉」より）にもぴたりです。記念の年に大勢の方にご覧いただき、南吉文学とふるさとの繋がりを感じていただければと思います。 ・榊原實さんは昭和30年代に新一さんの仕事手伝ったことがあり、機械化される前の井戸掘りの様子をご存知です。記念館へ来ていただいての取材も可能です。
別 紙	参考資料あり
写 真	寄贈されたゆかりの品や石碑の写真を提供できます。

半田市企画課企画広報担当
0569-84-0605



<参考資料>

●「牛をつないだ樁の木」で井戸新が登場する場面

……そこで井戸掘りの新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな声でしていました。井戸の底から、外にいる人にむかって話をするために、井戸新さんの声が大きくなってしまったのであります。

「井戸ってもなァ、いったいいくらくらいで掘れるもんかい、井戸新さ」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみだしながらききました。

井戸新さんは、人足がいかに、井戸囲の土管がいかに、土管のつぎめを埋めるセメントがいかにと、こまかく説明して、

「先ず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな」

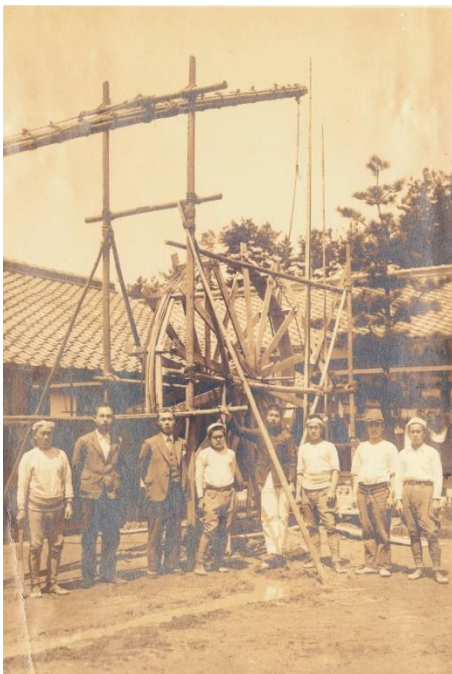
と、いいました。

注：作品の中で「井戸新」の名前は新一ではなく、「新五郎」となっている。

●「井戸新」こと榊原新一さんの証言（南吉から取材を受けたこと）

あるとき、正八つつあんが家へ訪ねてきて、井戸を掘るときのことについて尋ねられたことがある。縁側に腰をかけて、冷えた茶をすすりながら、井戸を掘るときの道具や働くときのようす、素焼きの井戸ごいの入れ方や組み方、水筋の見つけ方、材料のセメントや井戸がわの値だん、日当など、昔のことや今の井戸の掘り方など根ほり葉ほり尋ねられた。何でこんなことが必要だろうかと思っていたが、あとで南吉の「牛をつないだ樁の木」の話に俺が出ていると聞いて孫に読んでもらったら、あのとき南吉に尋ねられたことが書いてあった。

大石源三著『新美南吉の生涯 ごんぎつねのふるさと』より)



左 井戸新による井戸掘り現場の写真（昭和初期） 当時の井戸の掘り方は、人が穴に入って掘り進める「和掘り」と水車のような仕掛けを大がかりに組んで掘る「突掘り」があった。「突掘り」は水質と水量を求めて深く掘る際に用いられた。並んでいる人々の左端が榊原新一さん。

右 榊原新一さん（明治23年～昭和53年）

●今回、寄贈された「井戸新」ゆかりの品（一部）



左 「新田」「井戸新」と墨書された半切り（はんぎり・冠婚葬祭時に寿司や餅を入れた木箱）
右 「井戸新」で戦前から来客用として使われていた万古焼の急須と湯呑。南吉は「井戸新」に
取材した際、縁側で茶を飲みながら話を聴いた。もしかしたらこの急須と湯呑が使われたかも？

●移設・寄贈された石碑



童話の森に移設された石碑「探清泉」。
榊原新一さんが昭和 38 年に自宅に建立。
刻字の揮毫は、岩滑の光蓮寺の住職で南
吉とも親しかった本多忠孝師による。
高さ 80 cm。